

△新刊紹介▽

長尾角左衛門著

岩木川物語

羽賀与七郎

岩木川は津軽平野の大動脈であり、津軽の各分野の歴史的研究には、つねに、この川が浮び上るのである。この川についての断片的な研究が諸書にみられるが、総合的

な研究書なり調査書が、いままでに見られたいのが不思議であつた。岩木川に対する最初の関心は、その本流・支流の津軽平野における分布と、その水源である。こ

れについて、これら流域の古代より現在にいたる変遷、治水工事とこれに伴う土木技術の發展の歴史であり、さらに津軽平野開拓に果たした役割である。この川による運輸支運と津軽の産業経済の研究も、大きな研究課題であることはいうまでもない。岩木川の注ぐ十三湊の水戸口に位する十三湊は平安時代の末期に基礎づけられ、鎌倉時代になり、国内の商業と日本海への海運が發達するに於いて、港湾として隆盛に向っている。安東氏が大規模の新しい城をここに築いて根拠地としたことは、日本海で商船の往来が多く存つたことは勿論であるが、岩木川は津軽平野の運輸支運の大幹線であつたことを示している。十三湊は藩政時代には衰微し、これに代つて鰐ヶ沢が日本海への要港となつたが、しかし、例えは廻米の場合には、岩木川の川船により十三湊に米を集め、これをさらに鰐ヶ沢に運送し、ここから日本海を通じ大坂廻米を行うことが、藩政末期まで見られる。これを見ても、岩木川は依然として運輸支運の機能を果たしている。正保時代に陶鑿の測源を有する土測堰は新田地方四、七、一〇の町歩余りの水田を灌漑する大用水路であるが、岩木川水系を考へずには、土測堰の誕生は見られなかつたであろう。津軽平野開拓は如何に岩木川水系を活用するかの問題であつた。藩政以前の文明四年（一四七二）頃の川崎権太夫の人柱や、藩政以後の堰太郎左衛門安高の人柱による岩木川よりの用水確保の物語はこれを直確に示している。

岩木川の洪水・水害、これの対策すなわち、治水工事も今日にいたるまで藩政の重大問題である。全川の治水対策も、この衝に當つた人々の活動の記録も永く記憶されなくてはならないが、岩木川の風流も興味深いものである。本書の著者長尾氏は、岩木川に臨む五所川原市大字鵜ヶ岡に生れ、岩木川とともに生活したことは、その履歴の示す通りである。すなわち、北郡役所書記を振り出しに、北郡会議員を郡制の最後まで勤め、その間、岩木川改修期成同盟会を創立して、常任幹事または会長に就任し、あるいは、県会議員に當選している。終戦後、一度五所川原市会議長に當選し、昭和三十四年十一月には治水事業に貢献した功績により、日本河川協会より表彰されてゐる。この治水事業の功績というのは、岩木川の治水事業を意味することはいうまでもない。

著者は、大正五年八月鶴ヶ岡小学校同窓会編纂の『三好村誌』の編集主任委員であつた。この村誌は筆者は不幸にして未見である。また、昭和三十二年二月『三好村郷土誌』を著わしている。全誌には、当然のことであるが、三好村の陶鑿と岩木川の水害と治水にかゝる功績を費している。著者はその後、「津軽平野の母岩木川水源地泊嶽について」と題して『陸奥史談』才三十一輯（昭和三十六年九月）に、岩木川の水害についての研究を發表している。数え年八十二才の高齡にしての研作であり、普通人にはなほし得ないことであるが、岩木川に生れ岩木

本川とともに生きに著者にして、はじめてなし得ることであるかと、筆者は敬服していたのである。

さて、今回刊行された『岩木川物語』は、昭和二十一年に論纂を決意され、長年月にわたり収集された資料を基にして書かれている。表題は『岩木川物語』であるため、通俗的な岩木川の歴史物語と解される懸念がある。

しかし、本書を手にして理解しうることであるが、著者の岩木川を見る目には常に愛情があり、こうした愛情のある目で資料を集め、原稿にまとめたため「岩木川物語」と書森県知事竹内俊吉氏が題名としたのであるという。つぎに、本書の目次を掲げよう。

才一編 津軽平野の生い立ち

才一章 大昔の津軽

才二章 地質上の津軽

才二編 津軽平野の河川

才一章 河川法施行以前の河川管理

才二章 河川法施行及び洋用河川

才三編 津軽平野の水害

才一章 過去の水害

才二章 旧藩時代の河川掘替と築堤

才三章 明治以後の治水運動

才四編 岩木川と支通

才一章 舟航

才二章 農場

才三章 水源地

才三章 橋梁

才五編 津軽平野の開発

才一章 古い時代の津軽平野

才二章 津軽藩時代の開発

才六編 岩木川と漁業

岩木川一級河川指定促進運動

年表

本書の体裁はA5、本文五二八頁、年表五三頁、序文八頁、目次六頁、図版・写真十九頁、あとがき三頁の大部分である。目次よりわかるように、岩木川水系をのべ、全川の治水・支通、漁業、津軽平野の開発を藩政時代と縣政時代とに区分し、端的に、著者の生年以前と以後とに区分して、すべて記録・文献をして語らしめている。

しかし、著者が生活をともした縣政時代は資料も豊富であるため、従って本書の大部分を占めていて、筆者がさきに掲げた諸問題に大方答えている好著である。

岩木川の風流は他日を期するとして、岩木川を語るものの心証の書であり、座右に備うべき良書であることは信じて疑わない。

学術書である『岩木川物語』は長尾氏の八十七才の著書であることに敬意を表し、いよいよ文筆の健かなることを祈るものである。